「被災地・被災者からの報告」

七尾市本延寺住職（輪島市妙相寺代務住職）河崎俊宏師

みなさま、こんにちは。御紹介頂きました河崎と申します。よろしくお願ひいたします。初めに、能登半島地震で多くの皆さま方が直接死、また今も関連死として認められてきていますが、その方々へお題目を一唱みなさんと唱えさせて頂ければと思います。よろしくご唱和の程をお願いいたします。南無妙法蓮華經。

私の方から、被災者支援活動としてどのような活動がN・V・Nとして出来るかということで、能登半島地震による現状を少し話させて頂きたいと思ひます。まずは、ポイントとしいたしまして、私たち寺院や教師が安住や休養、心の安らぎや休息の場所というのをテーマにしなながら、被災地を振り返って、みなさま方がどういう支援ができるのかというところに繋げて行って頂ければと思ひます。

今私が住職をさせて頂いている地域が七尾、これが中能登地域です。被害が大きいのが中能登、そして奥能登地域でございます。私が住職させて頂いてる七尾の本延寺がある地区には本宗他宗を含めまして十六ヶ寺のお寺がございます。曹洞宗が四ヶ寺、真言宗一ヶ寺、浄土宗三ヶ寺、法華宗二ヶ寺、日蓮宗六ヶ寺でございます。代務住職をしている輪島地区、ここは市内に日蓮宗の寺院が三ヶ寺ございます。あとはほとんど真宗王国と言われるくらい、浄土宗の方が多いです。総持寺祖院がこの奥能登にあります。曹洞宗さんの地盤の影響があるというところですよ。

七尾市、人口は約五万三千です。農業・漁業、観光業が主な産業です。輪島市、人口が約二万七千、同じく農業と漁業、伝統工芸と観光業が主な産業です。珠洲市、人口が約一万四千、農業を中心に漁業、伝統工芸と観光業が主な産業です。能登町と言われる所、人口約一万七千、ここは漁業を中心に農業もあります。各地区ほとんどの地域に港があります。ところが港は一メートルから四メートルほど隆起によって、ほぼ使えない状態でございます。幹線道路は国道二四九号線、それから能登半島を横断するように能登里山街道というのがありますが全然使えませんでした。能登には空港がございます。能登空港というのがあります。滑走路が使えませんが、ほぼ使えない状態でございます。

こういう状況の中で、一月一日が起きました。四時十分でございます。マグニチュードが七・六、震度七ということですよ。夕方というふうに言われております。何をしていたか。私はこの時、午前中に輪島の妙相寺で新年の祝祷会を檀信徒と共にして、それを終えてお正月ですから七尾のお寺で又檀信徒と共に祝祷会を行って、ちょうど法要が終わってお茶を飲んでいる時に地震が参ります。最初は震度四くらいでした。おっ、と思ひました。ところがですね、その後、今まで経験もない震度七というのを経験いたしました。学者さんの一節によりますと、二つが連動という学者さんと、三つが連動したというふうに言われています。その前には、珠洲の何年も前から小規模な予震がありました。年間何百回。そして昨年地震がありまして、必ずこの辺は来るなど言っていました。もう少し怖い話しは佐渡と奥能登のところに、まだ動いていない、もう一個動いてないところがござまして、そのうち皆さん気を付けてくれということと言われております。

その地震の時ですけれども、地震が起きて、そしてその日その時から私たちの生活は一変しました。まず大津波警報です。この中でも津波の際、山の高台にお寺があって津波の際に避難所に指定されている御寺院があるんです。実はこの七尾の私が住職をしている本延寺の裏山が一番高台にありまして、其処に避難所というのが行政的に看板が建てられています。其処に一気に市民の方がどおっと上がってきたというところから始まりました。そこからお寺大変です。中に、本堂に入って頂ければいいんですけれども、一月一日北陸です。寒いです。本堂は壊滅状態です。外で夜を明かしました。その時にお寺にあった炭ですとかそういうものを全部焚きまして、この辺は高齢者が多いということから、火を焚いて暖を取って頂いて、地元の壮年団と青年団の皆さんにご協力を頂きながら、燃える物を持ってきて頂いて、椅子を持って来て頂いて、暖をとりました。翌朝まで。大津波警報が解除されるまでと、避難所開設というところまで、寺の裏にみなさんがいらっしゃいました。ここは大事でございます。というのはですね、ちょうど私たちの集まってきた津波で避難してきたところに町会長がいらっしゃった。皆さん百人位の方がどんどんどんどん上がってきて好きなこと言うんですね。そこで收拾が付かなくなるので、手を挙げさせて頂いて、恐れ入ります、ここに町会長さんが居られますので、町会長さんの情報源を一つにしますということで一本化を図り、そして皆さんに安否を確認しながら、火の元を消したかどうか色々聞きながらですね、壮年団や青年団の方々と一緒になって夜を明かして、町会長さんが何処何処の避難所、具体的に言いますと、お寺の裏にある小学校の避難所が開設されたということで、私たちが気を付けたのは、必ず避難所に行くのではなくて、自己判断なので、行く行かないは自分で決めてくれ、但し行く人は此方の方に来てくれ、動ける軽トラックを持って来て、軽トラックにお年寄りを優先的に乗せて、壮年団のお父さん方が、この道はOK、ここは駄目というのを全部把握して、避難所にお連れしました。夜八時過ぎ、九時前でしたでしょうか、最後の一人を避難所に届けた後、残ったのは町会長と私ども寺族だけでした。ところであんなたちどうすんだということで、私たちも避難所に参りますということから、一月のあの日から今も私は避難所生活でございます。

避難所生活で感じたこと、それは非常に役に立ちます。それを皆さんに今日ご提供させて頂ければと思います。

避難所はまず避難者が自主運営が基本です。お客さんになっちゃいけません。市や行政の方々がおいでですけれども、避難所の運営は私たちが自主的にやります。水や食料がありますので、そこで先ずは安心を得ました。まず目の前の命を繋ぐということ、そこが一つのここでのキーワードです。水、食糧の安心です。そして声の掛け合いです。いろんなことで病んでいる方、心を苦しんでいる方々に私たちはどう寄り添えるか。寺族や教師は避難所でどういう姿勢でいなければいけないのかということがありました。その時に全国の日蓮宗青年会のみなさまや、各青年会のみなさま、いち早く支援物資を届けて頂きましたこと深く感謝を申し上げます。それからNPOのE a r t hさん、TMネットワークさんが非常に献身的に物資を運んで戴いた事に未だに思い出すと頭が下がる思いでございます。そういう意味でも、支援物資の面と精神的支援が私たちには大切ではないかと思えます。

この避難所での生活で運が良かったのは、結論から申しますと、私たちが非難した百四十

人、一つの小学校に入りましたが、感染症が一件も出ませんでした。他の避難所はコロナとか感染症が非常に流行りました。何故か。これは偏に看護師さんと介護士さん、たまたま私たちが入った避難所はそういう方々が多くて、みなさん見ての通り土足のまま全部上がっていきます。そうするとですね、あの方々からの経験からすると非常にやばいということで、二日目の朝、みなさん一度体育館を出てください、そして男性の皆さんお手伝い出来る方、手伝ってください、看護師さんと介護士さんが主になって私たちに声をかけて、何をするのか、全館全部消毒です。消毒し終わったところから、そこから土足禁止ということが指示されまして、まさに自主性の元、それらがきちんと守られて、そして一時間に一回必ず換気をしてくれという放送が入ります。三分間、いくら寒くても三分間窓を開ける。そういうことで、消毒の徹底、うがいの徹底、あとは寝る前の消灯の時には歯を磨くことまで放送で呼びかけて、看護師さんや介護士さんが自主的に私たちにアナウンスをしてくれました。それによって私たちが非難した小学校には感染症が一件もでなかったというのは感謝をしています。

そのうちですね、ふと思いました。炊き出しの方々、いろんな方々から飲み物、それから食糧を頂きます。ふと思ったのは、放送が入ります。支援物資の配給があります。何処何処のところに何時から何時までの間に取りに来て下さい、というふうに入ります。それを聞いた時にふっと違和感を感じまして、つまり自宅で非難している人と自主避難している人、その人達はその場所に行って貰えばよいのですが、貰いたくても貰えない人が居る、ご高齢者、そしてご高齢の夫婦のみ、一人暮らし、以外と多いのが障がい者を抱える自宅で見ている家庭、そういう家庭は地震によって不安定になっているので一人にしておけないというご家庭が非常に多い。じゃあどうするかということから始まりました。緊急支援物資の配布が自宅と自主避難の方には行政持っていきません。取りに來い、です。そこで取りに行きたいんだけども行けない人たちをどう救うかというのが、私たちの役割ではないかと、家内と相談しまして、お寺で少し青年会やいろんな人から運んで頂いたものを、まずは水、それから冬場でございましたので低体温症で亡くなるお年寄りが非常に割合が上がってきます、そこで毛布、それからベッド、これらがたまたま有り難いことに本延寺の方に直接運んで頂ける支援者がいましたので、それらを車いっぱい積みまして七尾市、それから輪島の方に運ばせて頂いて、ずーっと今でも此処と此処を歩きながら、被災者であります、支援者でもあるということですからずっと続けております。そういう意味では私たちはそういうところにちゃんと目くばせしながら、被災者ではあるのですが、ただただ被災者であっていいのか、被災者でありながら、私たちの役割というのは何処かにあるのではないかとこの視点は持つべきだと思います。

一点、ブルーシート詐欺というのが能登半島地震の始めにあったことです。おじいちゃん、おばあちゃんが居る家の前にブルーシートを置いていってくれます。じいちゃん、ばあちゃんが、あら有り難いことだと使わせて貰うと、後日高額な請求が。それ以来、田舎の人たちの家の前に物資が置いてあっても、それ以来、絶対にさわりません。というふうになっています。私たちは水やら食糧やらどんどんどんどん支援で運ぶじゃないですか、どうすればよいか、名前を書きました。本延寺、妙相寺。ああお上人さんが来てくれた、お寺さんが来てくれた、これは大丈夫だといって、それを飲んでくれたり、燃料を使ってくれたりしました。こういうことも大事だというふうに思います。

避難所で生活をしておりますけれども、刻々と避難所の状況が変わってきます。できるだけ避難所で必要なものは、まずアポイントを取ることと、ちゃんと確保することが大事なところだと思います。そして要望がありましたら、出来るだけ早い段階で、その物資を届ける。せいぜい一週間です。一週間後には変わっているんです。それが現実には一ヶ月後に入ってきますね。それではもうその避難所とか自主避難しているところとか自宅避難しているところとか間に合っているんですよ。ですから緊急性がある場合には即やった方がよろしいかと思えます。

これは学んでことです。炊き出しです。当初、発災直後いちばん助かるのは経験から言うと、炊き出しです。朝、昼、晩です。これを他の所ではどういうふうに行っているかというところ、何処かの旗揚げが手を振ります。そして全国の支援がその旗の下に集まってきて、旗振り役がずーっと一ヶ月も二ヶ月も三ヶ月も居なきゃいけないわけじゃないんです。旗振り役が集めた人を役割分担させて自主的に其処に食事を作るということも大切なんだということを見て、それはなかったなど。他のボランティアの方たちはそういうふうに行っておられるのは、長期に渡って其処にちゃんと見える形でやるというのは非常に有効的だなということがありました。食事は安らぎを得ます。安らぎは避難者には大きな力になります。

ボランティアの人が避難所に入ってまいりました。避難所は自主運営が基本でございます。私たちの入った避難所は自主運営が非常に効率よくいっています。だんだんと一ヶ月半くらいから会社に行かなくてはならない人は日中空きます。そうすると人数が少なくなると、残ったのは動けるおばあちゃんたち、お元気な。そのおばあちゃん方が、私は今日このトイレ掃除するわ、私は灯油知れておくね、私ゴミ集めるわ、とすごく運営上手で良かった言われております。言われておりますというのは、実はその小学校が卒業式は良かったのですが入学式までには其処は退去して欲しいということで、その次は裏の総合体育館というところに異動になりました。非常に小学校の時は良かったなと思っております。

医師の巡回、マッサージ、鍼、そういうボランティア、良い香りのするオイル、安らぎをどうぞというのを持って来て下さる。台湾仏教会が積極的に入って来られました。各宗派の炊き出しを見て思ったのは、うちの宗派だけですね、あまり作務衣とかを着ず、一般の普通の格好で入ってくるのは。他の宗派の人たちは、むしろ作務衣でどうどうと着てますね。その辺は宗教色を出さないようにしているという配慮かも知れませんが、中に居ておじちゃんたち、おばちゃんたちの話しを見ていると、田舎だからかも知れませんが、むしろお坊さん方がやっている姿が非常に安心感を持っているというのがあります。今後私たちが作務衣や法衣や袈裟を着て行く場合と、そういうのを着ないで行く場合と、そういうのが全て宗教色を出さないというのは少しくエスチョンかもしれませんが、というふうに思いました。

全日青さんや東京南部さん、東京東部さん、みなさん朝のご飯、炊き出しを作って下さいました。その日は雪でございました。炊き出しする方の所は風も雪もいっぱい入って積もっているようなところでした。中で炊き出しをやっているお坊さんのお姿を見て、中に居るおばあちゃん方は窓越しにずーっと合掌していたのが非常に心に残っております。

支援のこの献身的な主体者、ありがたいと思うことが、安心へと変わっていき、その安心が、これから先の不安に対して勇気や力を与えてくださる、そういうものなんだなと思いました。

振り返ります。発災から一カ月は必死です。避難者は。必死に命をつなごうとします。そして二ヶ月から三ヶ月は、少し余裕があるのですが、明日の命をつなごうとします。三ヶ月半から四ヶ月以降は、精神的なケアが必要となります。この時期が我々の出番なのです。精神的なケアが必要で、ここで傾聴ですとか、そういうものをきちんと耳を傾けるというのが非常に大事だなと、むしろここから私たちが動かずして動くときはいつですかというふうに思います。

自然と被災者はあの当時のことを振り返って、みなさんにお話しをすることがあります。話させてあげてください。あの時を振り返って話しを聴いて下さる方に、話しをさせてあげてください。それが乗り越えて行く第一歩であると、見てて本当にそう思います。心の支えを今被災地は求めています。

事例です。輪島のお寺、代務住職をしているお寺ですが、本堂が倒壊いたしました。あの倒壊した山門も潰れた塀もぐちゃぐちゃになっている、がちゃがちゃのあの中で、外で一所懸命外から手を合わす人が非常に多く見られます。うちの家内が瓦礫の中から境内地のお地蔵様を何とかお救い出して元の在った場所に置いて、割れているんですけど、安置した。そうしたら翌日から、その割れているお地蔵様の安置した所に綺麗なお花が供えられていた。これを何と呼ぶかです。そこで私はいち早く地元でいつもお願いしている大工さんをお願いして、プレハブを用意してもらって、仏さんや仏具はもちろん、もう一つは誰もが手を合わせられる、外からでもちゃんと見える仏さま、ちゃんと手を合わせられる、家族のことを祈れる、この震災から亡くなった方の悲しみを救える、そういうお寺で在るべきだということ、プレハブを注文したところ、実は入って来られないんです、家があまりにも倒壊しすぎて。実はこれが全部撤去されてからじゃないと入れないというふうな現実がございました。ところが大工の棟梁が歩いてこの一軒だけがなければ何とか寺まで行けるね。ちょうどそれが空きまして、丁度先般プレハブが完成いたしました。これで被災者の皆さんの少しでも心の支えになればということで、今プレハブを設置いたしましたところでございます。

やはり、心身の安らぎや、安足の場所、これを私たちはきちんと提供できること、被災者が求めていることに応える、それが大事だというふうに思います。必ず毎月一日、輪島では朝市の方で火災がありましてですね、真っ黒のどっかの戦争のような光景がずっと続いておりますけれども、寒修行で毎年歩いていた場所で、ずっと太鼓の音を聞くと店の前に出て頂いて「こちらもお願いします」と言っていた店店がずっと亡くなられた方が多い、いても立っても居られませんが、一緒に廻るぞと、太鼓を持って被災者の火災があった場所、太鼓を叩いて御供養に未だにやらして頂いています。

これが後々、被災者への慰霊行脚へ近づく、地元の者の責任として土壌をちゃんと作っておくことも必要なんじゃないかなと思います。